

絶滅危惧種カブトガニの保全を目的とした実践調査体験 in 北九州市曾根干潟

野上 凌¹, 泉山真寛², 水守裕一², 東垣大祐²

¹九州大・院・地球社会統合科学、²兵庫県立大・環境人間

はじめに

「生きている化石」ともいわれるカブトガニ (*Tachypleus tridentatus*) (図1) は干潟環境に生息する絶滅危惧種である。カブトガニは砂浜で産卵、干潟で幼生期を過ごし成体は沖合いへ移動すると考えられている。産卵期の調査は成体の行動に関する情報を得る絶好の機会である。今回は日本の生息域の中で最も個体数が多いといわれている、福岡県北九州市曾根干潟でおこなわれたカブトガニの繁殖ペアにおける個体サイズの関係性の調査に同行させてもらった。今回の本格的なフィールド調査に参加してもらい、その実践経験から科学研究のあり方や地域の自然環境の保全に必要なことはなにかを学ぶことを目的とした。



図1 カブトガニ

仮説

カブトガニペアの雌雄間で個体サイズに相関関係はあるのか？



図2、3 カブトガニのペア

方法

調査地点：福岡県北九州市小倉南区曾根～曾根新田地区 (図4)

調査日時：2016年7月18日～21日 (気候：晴れ，潮位：大潮)

調査内容：1、カブトガニの繁殖ペアのサイズ計測とマーキング (図5)

2、繁殖ペアの産卵行動等の記録

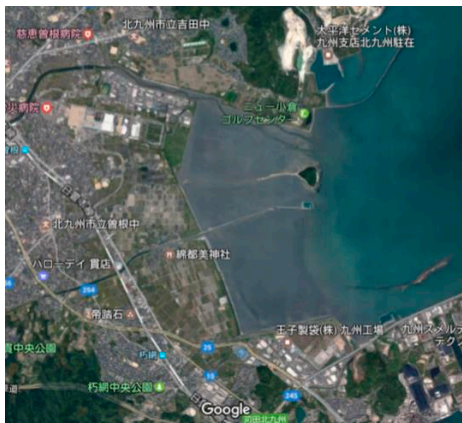


図4 曾根干潟周辺 (<https://www.google.co.jp/maps>)



図5 調査風景

結果と考察

ペアの雌雄間の体サイズに相関関係は見られなかった。(図6) このことから、カブトガニの雌雄は体サイズに関係なくつがいになることができると考えられる。また、カブトガニは満潮時に砂浜で産卵したあと、潮が引く前に海底に戻ると言われている。しかし、今回の調査では干潮時に干潟に埋まった多くのカブトガニペアを発見することができた。(図7) このことから、カブトガニの産卵などにとって重要な場所にもかかわらず、保全すべき場所として目をつけられていない場所が存在する可能性があると考えられる。

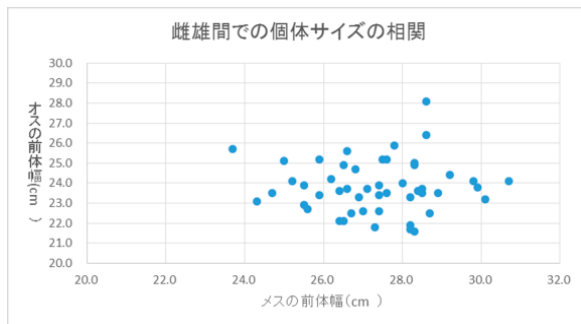


図6 ペアの個体サイズの相関(和田ら 未発表データ)



図7 干潟に埋まったカブトガニ

学生それぞれが感じたこと



私は、カブトガニの研究者の1人として、絶滅の危機に瀕している日本のカブトガニに対し、様々な地域において保全活動が必要であると考えている。多くの人の力を要するこの保全活動を行うためには、カブトガニのことを知ってもらうことが必要であり、その場所として、多くの産卵ペアを観察することのできた曾根干潟は最適な場所であると考えた。

今回行ったような産卵調査を、今度はイベントとして開催し、より多くの人にカブトガニがいるということをはじめ、絶滅の危機にさらされていることを知ってもらい、干潟の清掃などの保全活動への参加を訴えかけることが出来るのではないかと考えた。さらに、清掃活動や産卵観察の様子を、インターネット等を通じて拡散することで、他の生息地域においても保全活動が活性化されることが期待される。(野上 凌)



私は、曾根干潟ではじめて生のカブトガニに触れたが、その独特な生態に驚いた。生きた化石とも呼ばれるカブトガニは、豊かな干潟がなければ、産卵し子孫を残すことはできない。今回の調査で、カブトガニの産卵場所として、干潟近くの川の河口付近など、重要な場所にもかかわらずまだ目をつけられていない場所があった。その場所を特定し、ビオトープネットワークとして情報管理する必要があると考える。

また、この干潟は人間活動とも接触する場所である。そのため、この豊かな曾根干潟の環境を今後も守っていくためには、カブトガニの生態を研究するだけでなく、カブトガニが生息する地域を社会面からも支えていくということが必要になる。地域の人、研究者、行政など多様な主体が関わり、地域内外での協力のもと保全を進めていく必要もあると考えた。(泉山 真寛)



私はカブトガニを教科書やメディアを通してしか見たことがなく、漠然と希少な生物なのだから一度見てみたいという思いで参加しました。実際に泥にまみれながらカブトガニに触れることで、カブトガニを身近に感じることができ、また、潮の引いた広い干潟で3cmほどのカブトガニの幼生を見つけたときはとてもうれしかった。現代では多くの人が生き物に触れる機会が少なく、カブトガニに限らず多くの生き物を遠い存在と思っているのではないかと思います。今後は地元の人だけでなく、私のように他の地域に住む生き物に興味がある人が参加しやすいような企画があると良いのではないかと感じた。一例として、生き物と触れ合うツアーなどで、実際にカブトガニに触れる機会を作ることがカブトガニの保全につながるのではないかと考えた。

(水守 裕一)



私の家の周りは山に囲まれているため、干潟という場所にごつりと足を踏み入れることは、今回がはじめての経験であった。泥干潟での調査は足元がぬかるんでいて思うように動けず、とても大変なものだった。しかし、泥の中からカブトガニを見つけた時はその大変さを忘れられるくらいワクワクした気持ちになれた。また、カブトガニ以外にもたくさんの魚類や甲殻類を見ることができて、とても楽しい時間だった。

曾根干潟のようにカブトガニがたくさんいるような豊かな自然環境を各地で次世代に残していくには

どうしたらいいかをもっと多くの人が真剣に考えていくべきだとおもう。干潟の魅力に触れたことのある人をすこしでも増やすことが干潟の未来を考える原動力につながっていくのではないかと感じた。

(東垣 大祐)



謝辞

本調査にご協力をいただいた日本カブトガニを守る会副会長・福岡支部長の高橋俊吾様、曾根干潟・カブトガニ自慢館の行村真様に厚く御礼申し上げます。

また本調査に同行する機会を作っていただいた兵庫県立大学自然・環境科学研究所・和田年史准教授に深く感謝致します。